

留学・研究計画書

氏 名 岡田 雅志	留学機関 名 チュラロンコーン大学文学部
留学先国 タイ王国 名	留学期間 西 2008年6月～2010年5月 歴
研究テーマ 18, 19 世紀の大陸東南アジア北部における社会動態とエスニシティーベトナム西北地方タイ族の首長権力形成を事例としてー	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>本研究の目的は現在のベトナム社会主義共和国の西北地方（あるいはシップソンチュータイ）におけるタイ(Thai)族首長権力の形成過程を明らかにすることにある。</p> <p>東南アジア大陸部を中心として西南中国、インド・アッサム地方にも居住の拡がりを持つタイ(Tai)系諸族は東南アジア地域の重要なアクターとして、民族学、言語学、歴史学など各分野で研究が進められてきた。特にその中でも、外来の上座仏教を受容していないタイ族は、タイ諸族の古層文化を保存しているとされ、その文化や社会構造が多くの研究者の関心を集めている。しかし、既存のタイ族研究は二つの点で大きな限界と問題を抱えている。第一点はタイ族というエスニシティがベトナム国民国家あるいはタイ諸族という枠組みの中で静態的に捉えられている点、第二点はタイ族が同地に移住してきた後の歴史的変化を等閑視している点である。</p> <p>申請者の問題視角は、如上の問題を克服し、新たに大陸東南アジア北部というマクロ地域的な視点を導入し、18, 19 世紀という近代につながる移行期 (Transitional Period) という時代的文脈の中に当該地域を位置づけ直そうという点にある。申請者がこれまで行ってきた研究や近年の関連分野の研究成果によれば、18, 19 世紀の当該地域は、共通した外部刺激と社会変容を経験している。例えば 18 世紀の鉱山開発ブーム、19 世紀における森林産物の需要の増加は（いずれも中国市場の需要に刺激されたもの）、同地域が当時の広域経済システムに連結していたことを示す。それに付随して鉱山労働者として大量に流入した中国人や森林産物の収集に直接携わるサーと呼ばれる山岳民族といった「外部者」を、どのようにタイ族首長が支配する政体の中に組み込むかが重要な課題であった。また、周縁諸地域への支配を強めるベトナム、中国、タイ（シャム）など周辺諸国の存在についても、軍事的脅威であると同時に、地域内における首長権力に認証を与え、交易による利益をもたらす存在でもあり、政治・経済・文化の全ての面で現地社会に大きな影響を与えていた。既存の研究では、可耕地に限られる盆地という閉鎖的空間の中で水田耕作を行うタイ族社会における首長権力の源泉として歴史性とコスモロジーが強調され、上記のような変化や外部世界とのつながりはほとんど考慮されてこなかった。申請者の研究は、当時の社会が有していたトランスエスニックかつ開かれたダイナミズムの中で、タイ族のエスニシティがいかに形成されていったかを考察するものである。</p> <p>近代以前のトランスナショナル、トランスエスニックな社会のあり方を明らかにしようとする本研究の成果は、特に現在、国際的なメコン開発プロジェクトが進行する同地域において、ネーションが溶解しつつあるグローバル時代における民族共生のあり方を探る上でも格好の材料を提供するものである。</p>	

成果報告書

記入日 2010 年 11 月 30 日

氏名 岡田 雅志	留学先国名 タイ王国	所属機関 チュラロンコーン大学文学部
研究テーマ: 18,19 世紀の大陸東南アジア北部における社会動態とエスニシティーベトナム西北地方タイ族の首長権力形成を事例としてー		
留学期間 : 2008 年 6 月 ~ 2010 年 6 月		
<p>1. はじめに</p> <p>報告者はベトナム西北地方におけるタイ(Thai)族社会、特にチャウムオンと呼ばれる首長権力の歴史研究を行ってきた。東南アジア大陸部を中心として西南中国、インド北部にも及ぶ広範囲に居住するタイ(Tai)系諸族は東南アジア史における重要なアクターとして、民族学、言語学、歴史学など各分野で研究が進められてきた。特にその中でも、外来の上座仏教を受容していないタイ族は、タイ諸族の古層文化を保存しているとされ、その文化や社会構造が多くの研究者の関心を集めている。しかし、既存のタイ族研究は二つの点で大きな限界と問題を抱えている。第一点はタイ族というエスニシティがベトナム国民国家(を構成する一少数民族)あるいはタイ諸族(の中で国家形成に至らなかった「部族的」タイ)という枠組みの中で静態的に捉えられている点、第二点はタイ族がベトナム西北地方に移住してきた後の歴史的変化を等閑視している点である。</p> <p>報告者は如上の問題に対し、新たに大陸東南アジア北部(山地世界)というマクロ地域的な視点を導入し、18,19 世紀という近代につながる移行期(Transitional Period)という時代的文脈の中に当該地域を位置づけ直すことを企図する。報告者のこれまでの研究や近年の関連分野の研究成果によれば、18、19 世紀の西北地方は、共通した外部刺激と社会変容を経験している。例えば中国市場の需要拡大に刺激された鉱山開発、森林産物交易の興隆であり、同地方が当時の広域経済システムに連結していたことを示す。こうした、外部環境の変化や、山地世界への支配を強めるベトナム、中国、タイ(シャム)など低地の諸国家に対して、在地社会の支配者であるタイ族首長がどのように対応していったのかを分析することを通じて現在のタイ族社会を形成した歴史動態を明らかにすることが本研究の目的である。</p> <p>このようなトランスナショナルな地域の歴史研究を行なうには、多言語史料の使用、そして史料を読み解く研究者自身の視点を複眼化することが必要である。今回、松下国際財団(現松下幸之助記念財団)のご助力を賜り、複数の国・地域にまたがる調査・研究活動を行なうことができた。以下に、調査・研究の概要とそれにより得られた知見について報告する。</p> <p>2. 調査の概要と得られた知見</p> <p>本研究はバンコクとハノイという 18-19 世紀にかけて西北地方に対して政治的関与を行なったタイ・ベトナム二つの低地国家の首都に集められ保存されている史料群に対する文献調査と、西北地方のみならず自由/強制移住によって両者の間に広がる空間に点在するタイ族の集落における現地調査からなる。</p> <p>2-1. 文献調査 [バンコク]</p> <p>タイ、バンコクではラーマ 4 世期以前(~1868 年)の文書を保存している国立図書館古籍部とラーマ 5 世期以降の文書を保存している国立公文書館で調査を行なった。前者においては、数は多くないものの、ラーマ 1 世期(1782-1809)及びラーマ 3 世期(1824-51)を中心に、西北地方あるいはその周辺地域に言及している貴重な一次史料を見ることができ、いくつかの新しい知見を得ることができた。たとえば、タイ(当時はシャム)の西北地方に対する関与の始まりはトンブリ朝期のメコン中流域経略(ヴィエンチャン、ルアンパバン、チャンパサク王国の朝貢国化)過程における西北地方への軍派遣(1779 年)であることが知られているが、今回の精査した文書史料と年代記における記述の再検討により、あくまで軍派遣に積極的であったのはルアンパバンであることがうかがえる。当時の西北地方はベトナム・キン族出身の反乱指導者黄公質(ホアン・コン・チ</p>		

ヤット)の勢力下にあり、史料に見られる攻撃対象には黄公質が拠点としていたムオン・タイン(現在のディエンビエンフー)が含まれることから、むしろルアンパバンの王権が地域権力の再確立のためにシャムの遠征を利用したという可能性もある。ここで得られた知見は 18 世紀におけるメコン中流域と中国とを結び内陸交易構造におけるムオン・タインの位置づけの変化について論じた後掲の国際学会発表にもつながった。また、19 世紀末にシャムとフランスがメコン流域の領有権を争う時期の史料において頻りに言及される、シップソンチュータイという現在の西北地方に重なる範囲を指して用いられる名称については、19 世紀前半においては使われていないことが確認できた。その意味の検討と、シャム以外の史料も含めていつからシップソンチュータイの名称が使われるようになるのかについては、今後の研究課題としたい。また、国立公文書館においては、ラーマ5世期(1868-1910)の主に地方長官や軍司令官からの報告書である「バイ・ボック」のコレクションにおいて西北地方に関わる史料を探索した。その結果、同時代の西北地方の状況やタイ文化圏(東南アジア大陸北部のランナーやシップソンパンナ王国などタイ系民族の盆地政権を中心とする共通文化圏)の地域秩序における西北地方の位置がかなり明らかになった。また、その中に西北地方のタイ族首長自身が現地文字で記した外交文書(及びそのタイ語訳)を発見することができた。同時代の彼らの肉声を記したものとして極めて貴重なものであり、現在分析を進めているところである。

[ハノイ]

ベトナム、ハノイにおいては、漢文・チュノム研究院や史学院に所蔵されている漢文史料及び第一国立公文書館が所蔵している 19 世紀の阮朝地簿及び 19 世紀から 20 世紀前半にかけての行政文書史料コレクション(漢文、クオックグー、フランス語)について史料調査を行なった。第一国立公文書館については、残念ながら留学期間の一部が移転によるサービス停止期間とかぶってしまったため、当初予定していたほどの時間をとることができなかったが、それでも、多くの貴重な史料を収集することができた。特に地簿に関しては、過去にフィールド調査を行なったギアロ盆地周辺(阮朝下の行政区画では文振県)のものは収集していたが、今回、西北地方の主要部分の地簿を全て収集することができたのは非常に大きな収穫であった。これらの地簿史料から同じ西北地方においても、阮朝の統治権力の浸透度に大きな差があることや、現地社会の状況のミクロの変化を見て取ることができる。現在もデータベース化及び分析作業を進めており、早急に研究成果として公表したいと考えている。また、阮朝の行政文書のコレクションである阮朝硃本についても、その龐大な量と、上記の時間的制約のため全てに当たることはできなかったが、19 世紀のタイ族首長の政治行動や社会状況を示す興味深い多くの文書にめぐりあった。例えば、阮朝の鉱産・森林資源管理政策の中で、ハノイに駐在し、物産の買い付け(和買)に従事する首長の属人の存在や、メコン流域の支配権を巡ってシャムとの関係がセンシティブになってゆく状況において、外交チャンネルあるいは情報提供者として活躍するタイ族首長達の姿を記した文書などである。そこからは、これまでの低地政権の支配圏の拡大とそれに飲み込まれてゆく山地世界の小政体というイメージとは大きく異なり、外部環境の変化に応じてアクティブに行動するタイ族首長の姿が見えてくる。

2.2 現地調査

現地調査については、ベトナム西北地方のタイ族集落及び 18 世紀末から 20 世紀前半にかけての政治的変動の中で拡散していったラオス、タイのタイ族(その中でも主に黒タイ集団)あるいはその末裔とされる集団の集落を調査し(地図参照)、移住をめぐる語りと民族としての歴史記憶の関係について考察することを試みた。

[ベトナム]

ベトナム西北地方のタイ族村落については 2004 年に 2 ヶ月間の滞在調査を行なったギアロにおいて 2 度のフォローアップ調査を行なった。数年ぶりに訪れたギアロの町は近年のベトナムの経済成長の影響か前回の時よりも活気に満ちているように感じられた。滞在調査時のホストファミリーの主であり、地元で有名なタイ族知識人であるビエン氏は、最近タイ文字教室や、史跡指定プロジェクトや出版のための古タイ文字史料の翻訳で忙しいと(うれしそうに)こぼしていた。ベトナム政府が少数民族の問題に非常にナーバスである上に、1952 年にベトナム人民軍により「解放」されるまで、ギアロのタイ族首長が植民地政府に従っていたこともあり、2004 年に調査を行なった際には、ビエン氏がギアロの歴史について語るときのその口元には、ベトナムの民族問題の縮図がそこに詰まっているかのような、なんとも言えないものを感じたのを覚えている。しかし、今回のビエン氏の語り口からは(もちろん話題によるのであろうが)あまりそういった印象は受けなかった。近年は少数民族文化を観光資源として見直す動きや経済発展を背景とする地域文化復興の流れの中で(こうした動きはベトナム政府の少数民族の取り込みに対する自信と余裕を反映しているともいえる)、民族としての過去について語ることの意味合いが変化していることを考えさせられた。

[ラオス]

シエンクアン県のムオン・カムとヴィエンチャンのノーン・ブア・トーンを中心に調査を行った。ムオン・カムでの聞き取り調査においては、シエンクアンの黒タイ集落が、1954年のディエンビエンフーの戦いの後、フランス軍とともに移動してきたグループとそれ以前の100年以上前から居住しているグループに分かれることが明らかになった。これはタイ・ルーイ県の黒タイ移民集落での、19世紀末にヴィエンチャン、シエンクアンから移住してきたという聞き取りとも符号している。ルーイ県で得られた情報では移住後も水牛を売りにシエンクアンまで行っていたとのことであり、戦争難民としての拡散以前から国境を越えた黒タイのネットワークがメコン中流域に広がっていたことがわかる。ヴィエンチャン市内に現在ある黒タイ集落は完全な難民集落であり、現在のベトナム・ソンラ省クインニャイ県の出身であるというこの集落に住む古老によれば、若い世代はラーオ(ラオスの低地部に居住する主要民族)との同化が急速に進んでおり、自分の土地を売却あるいは賃貸運用をし、引っ越してしまった住民も多いため、ここにあった黒タイの文化は失われつつあるということである。同じラオス内の黒タイ集落であるが、観光化の波にも乗り、黒タイ文化センターを作っていたムオン・カムの集落とは対照的であった。

[タイ]

タイにおいて黒タイとされる民族集団は、上述の自由移動によって生まれたルーイ県の集落と、18世紀末以降のシャムによる軍事的関与の中で戦争捕虜あるいは朝貢国であったヴィエンチャン、ルアンパバン王国から献上品としてバンコクに連れてこられ、入植させられた集落のもの二つに分けられる。後者については、ラオソンあるいはタイソンダム(ダムはタイ語で黒を意味し、黒タイの自称は「タイダム」である)と呼ばれ、最初にペップリー県カオヨーイに入植させられ、ラーマ5世の不自由民の解放により、一部、故郷を目指して移住したグループが途中の各地に集落を作っていたと言われている。実際にタイ中央部の各県には多くの黒タイ集落が点在しているが、故郷とは反対方向にあるチュムボン県の集落を含め個々の集落において移住の理由に関して聞き取りをしてみると、土地の不足などの経済的理由や集落内の争いなども理由としてあげられていた。また、タイソンダムの強制移住に関する文献記録を調べてみても、タイソンダムの祖先の中に黒タイが含まれているのはおそらく確かであるが、一方で黒タイの居住域とは明らかに異なる地域の住民が含まれているなど、黒タイ=タイソンダムということは難しいことがわかった。現在のようなタイソンダムとしてのエスニシティが形成される過程については、タイ政治あるいはインドシナの現代史と密接に関係しており、その詳細な考察は後掲のタイ語で発表した論文の中で行っているが、一つ言える興味深い事実は、ベトナム、ラオス、タイの中で現在もっとも標準化されたアイデンティティを共有しているのがタイの「黒タイ」だということである。現在、タイ国内の各地域で黒タイ協会など各種団体が作られ、サイバー空間を利用しながら(アメリカの黒タイ難民が作ったウェブサイトにある黒タイ文字テキストを使った民族文字教育、Hi5などのソーシャルネットワークの黒タイ・コミュニティなど)、「黒タイらしさ」を競い合い、共有化しているように見える。これは、政治・経済状況の異なるベトナム・ラオスでは少なくとも現在のところ全く見られていない現象である。

3. 研究成果と今後の予定

以上に報告した研究活動の成果の一部は下記の通りすでに公表されているが、今後も収集した史料、データの分析を続け、雑誌論文、最終的には博士論文の形で公表し、学術面のみならず、あらゆる機会をつかまえて、今回いただいた貴重な時間の成果を社会に還元できるように努めてゆきたい。

(学会発表)

2008.12「18世紀におけるムオン・テーンの動態的变化:山地のエンポリアムと反乱指導者ホアン・コン・チャット」第3回ベトナム学国際学会(ハノイ)“The Dynamical Changes of Muong Then in the 18th century: An Emporium in the Mountains and a Rebel Leader, Hoàng Công Chất,” at the 3rd International Conference on Vietnamese Studies (Hanoi) (論文)

2009.5「民族の過去を研究すること:なぜ私は「黒タイ族」の歴史に関心を抱くのか?」ピヤダー・シオンラウオーン編『東南アジア研究に関する論文集及び書誌』バンコク:タマサート大学文学部東南アジア研究プログラム, pp. 93-104. (タイ語) มาชาติ โอคาตะ “การศึกษาอดีตของชาติพันธุ์ : ทำไมข้าพเจ้าถึงสนใจประวัติศาสตร์ของ “ชนกลุ่มไทดำ”” ใน ปิยะดา ชลวร(บรรณาธิการ). รวมบทความและบรรณานุกรมว่าด้วยเอเชียตะวันออกเฉียงใต้ศึกษา, กรุงเทพฯ: โครงการเอเชียตะวันออกเฉียงใต้ศึกษา คณะศิลปศาสตร์ มหาวิทยาลัยธรรมศาสตร์ 2552, หน้า 93-104.

【留学全般の感想】

正直なところを言って、上で紹介させていただいた文献調査で得られた知見と現地調査で得られた知見は、部分的にリンクはしているが、必ずしも一つの研究として同じ方向性を向いて収束していくものではない。それは史料という過去に存在した点からのアプローチと現在、自分が認知している現象からのアプローチという

文献学とフィールドリサーチの手法の違いに起因するところが大きいように思う。今回、文献調査、現地調査双方に十分な時間をかける幸運な時間を与えられ、改めてそのことを思い知ったところである。しかし、過去に存在した点を見ているのは現在の自分であるし、現在の自分が認知している現象は過去の無数の点から伸びている線が交差するところに存在していることも確かである。今回のタイ・ラオス・ベトナムにまたがる調査の移動は時間が許すかぎり陸路の移動にこだわった。経費節減も理由の一つであるが、かつてタイ族をはじめ多くの人達が移動してきた空間を空から一瞬で飛び越えてしまうのはなんだかもったいない気がしたからである。大きな荷物を抱えたおばさん達とイミグレの前で順番を争った経験（順番待ちの列など存在しない）も、ラオス女性の素晴らしさを熱弁を振るって伝えてくれたベトナム人民軍特殊部隊を名乗る男性との出会いも、飛行機の上では体験できなかったであろう。調査先のみならず、この2年間で触れることのできた全ての事象が私の中に蓄積され、過去の点を見る目に影響を与えてくれるのではないかと思う。

その意味でも、過去を記述することの意味をあらためて問い直された2年間でもあった。今回、各国・各地の「タイ族」の人々が紡ぎ出す過去の語りを聞くことができたが、それぞれの語りが全て大きなリアリティを強く感じさせた。「普遍的史実」「学問」「統合」といった言葉は、時に私が感じたリアリティを色あせさせてゆくこともあるのであるが、その語りは、それを発した人がいる／いた環境の中で大きなリアリティを持っていることは事実なのであり、その事実を知ったとき、やはりそのリアリティは私に重くのしかかってくるのである。タイのタイソンダムというエスニシティの虚構性を文献研究的手法により証明することは簡単（とはいっても非常に手間のかかる作業が必要である）であるかもしれない。しかし、そこにどういう意味があるのか、またそもそもタイ族と縁もゆかりもない人間が何の資格があつて彼らの過去を語るすることができるのか。こうした悩みを解消する有効な処方箋を私はまだ見つけていないが、タイ族の人達とふれあいながら、この問題をじっくり悩むことができたのは非常に幸福だったと思う。今後もこうした重さと向き合いながら、歴史研究を続けていきたい。

【謝辞】

最後になりましたが、このような貴重な2年間という時間を与えてくださった松下幸之助記念財団及び審査員の先生方に心より御礼申し上げます。特に事務局の皆様には色々ご迷惑をおかけしたにもかかわらず、いつも明るい言葉で励ましていただき救われる思いでした。今後とも、感謝の気持ちを忘れることなく、「ペイフワード」の精神で、社会に貢献していけるよう自己を鍛錬して参りたいと存じます。本当にありがとうございました。